

Hello! FUJISEI

No. 44

近年は、患者中心の医療が望ましいとの観点から、病院などで診療をする際には、患者や家族に対してその病状や治療法などについて十分な説明をし、それを理解し納得した上で自分あるいは家族にふさわしい医療を選択することが求められるようになっていきます

しかし、ドクターや医療関係者から受ける説明を本当に理解できているのでしょうか？ 病気になったりけがをしたりする前には、聞くことのなかった、なじみのない分かりにくい言葉が登場したり、よく知っている言葉と混同して誤解してしまうケースもあります。

例えば、「貧血」「ショック」などを正しく理解されているでしょうか？

国立国語研究所の調査では、「貧血＝急に立ち上がったときに立ちくらみを起こしたり、長時間立っていたときにめまいがすること」と誤解していた割合は67.6%もありました。

「貧血」を明確に説明すると、「血液の中の赤血球や、その中の色素が減った状態を言う。その色素のことをヘモグロビンと言う。赤血球やヘモグロビンは、全身に酸素を運ぶ働きをしているので、不足すると酸素が足りない状態になり、めまいや息

ドクターの説明が理解できますか？

知っている用語との誤解も多く要注意！

切れなどの症状が現れる。気持ち悪くなつて立ちくらみを起こして倒れることを『貧血』という場合があるが、ここで言う貧血とは別の病気である」となります。みなさんはいかがでしょうか？ドクターの説明を誤解していたとしたら怖いですね。

「病院の言葉」を分かりやすくする工夫例

◆ 腫瘍（しゅよう）マーカー ◆
まずこれだけは
がんがあるかどうかの目安になる検査の値
少し詳しく
「がんがあるかどうかの目安になる検査の値です。がんがあると、健康なときには見られない物質が血の中に現れます。その物質があるかないか、増えているかないかで、がんがあるかどうかの目安になるわけです。数値が高いときには、別の検査に進む目安となります」
時間をかけてじっくりと
「がん細胞の表面には、正常の細胞では見当たらない物質があり、はがれて血液の中に流れ込みます。血液を調べてそれが見つければ、がんにかかっていることが分かるわけです。がんの種類によってその物質は異なっており、それぞれの目安となる値が決められています。このような、がんであるかどうかを見る目印となる物質やその値のことを『腫瘍マーカー』と言います。しかし、その値は個人の状態にも左右されますので、高い低いだけでははっきりしたことは言えません。したがって、数値の解釈は患者さんが自分で行うのではなく、医師の説明を受けて判断することが大事です」
こんな誤解がある
(1) 腫瘍マーカーの値が正常値だからがんではない、がんが治ったなどのように誤解する人が多い (22.1%)。また、腫瘍マーカーが高い方が悪いがんであるなどと誤解する人もいる (12.9%)。
(2) 腫瘍マーカーの数値ががんの進行度を表していると誤解している人もいる (17.5%)。
(3) がん細胞が出す物質の方ではなく、検査に使う試薬のことを「腫瘍マーカー」と言う誤解している人もいる (8.4%)。
言葉遣いのポイント
「腫瘍マーカー」という言葉の認知率は比較的高いが (64.3%)、理解率はまだ低く (43.5%)、意味の説明を十分に行うことが求められる言葉である。
不安を和らげる
腫瘍マーカーを万能に思って、過度に安心したり、過度に不安に思ったりする人が多いので、数値の解釈の仕方を丁寧に説明し、慎重な判断が大事であることを強調する必要があります。また、腫瘍マーカーだけに頼らず、定期的な検査をきちんと受けるように説明する必要があります。
ここに注意
「マーカー」という言葉を目安、検査の値などの意味で用いるのは、一般の人には分かりにくいので、「がんかどうかを判定する目安」などと、説明を付けるようにしたい。

国立国語研究所「病院の言葉」委員会『「病院の言葉」を分かりやすくする提案』より